

○はじめに

元禄の三人・近松、芭蕉、西鶴の関西における史跡をさぐっていくことにしよう。細かく言えばキリがないので、主なものを中心とする。その前に、三人の生年と没年をあげておこう。近松（1653～1724年、72歳）、芭蕉（1644～1694年、51歳）、西鶴（1642～1693年、52歳）、近松のほうが他の二人より10年程後の生まれであるが、亡くなったのは30年程後である。しかも「曾根崎心中」が1703年、51歳の作であり、芭蕉、西鶴の亡くなったあたりの年齢で、以後人口に膾炙した（世話物の）名作を、死の前まで生み出しているのである。「長生きも芸のうち」と言えるが、偉人は必要な年数だけ生きるとも言われる。

○近松の史跡

近松の生まれは、越前（福井県）とされるが、15歳頃父が浪人したために一家で京に上った。近松門左衛門の名は、20歳の頃、遊学した近江の近松寺（歌舞音曲の寺）に由来しており、近松寺の門前小僧というような意味だとされている。本名は杉森信盛。そして近松は初め公家に仕えていた——ここで古典などの教養を身につけたとされている——が、やがて芝居の世界に飛び込んだ。当時卑賤の河原者とされていた世界に入ることに、それなりの抵抗もあったものと思われるが、当時は人形浄瑠璃の勃興期でもあり、この世界に生涯をかけることに決意した

関西の近松、芭蕉、西鶴の旅

前 兵庫県立川西北陵高等学校

小田 剛



のであろう。批判はあったが、初めて脚本に作者名を書いたことにも、それはあらわれていると言えよう。54歳の時、京都から大坂（阪）へ移住するのであるが、それまでに坂田藤十郎のために、「傾城王生大念仏」などの歌舞伎脚本も書いていた。藤十郎の（健康面などの）衰えもあったろうが、歌舞伎はあくまでもスター中心で制約があり、己れの腕が存分にふるえる浄瑠璃に身を転じたものと思われる。

53歳の時、竹本座の座付作者となつて浄瑠璃に専念するのであるが、72歳で没するまでその筆力が衰えることは決してなかった。墓は各地にあるが、尼崎の久々知の広濟寺にあるのが一番有名で大きく、近くに公園、記念館がある。この記念館で近松について教えられることが殊更に多い。JRの駅より歩いて10分程である。また大阪市内の上町台地、上本町六丁目近く、西鶴の墓がある誓願寺の近辺にも分骨があるが、間口が狭く、通りの東側でややもすれば見過ごしそうな所にある。以上このように京、大坂に住んだ近松であるから、史跡はおびただしい。まずは竹本座から。江戸時代、浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座は道頓堀五座（五つ櫓、浪花五座）と呼ばれ、歌舞伎や人形浄瑠璃が上演された。竹本座は、この浪花座の何代か前の座であり、「竹本座跡」が、「道頓堀川に架かる戎橋の南東側、道頓堀ゼロゲート（浪花座跡地）の西側植込みに竹本座跡の碑がある。」（大

阪府の歴史散歩』山川出版社、2007年、54頁）と記述される。

○近松作品の史跡

さらに、江戸時代社会のシ、ステ、ムに殺された悲劇の作品の舞台を各々見ていこう。「曾根崎心中」の舞台は、露天神社（お初天神）の地であり、阪急大阪梅田（埋田が名の由来）駅から至近の距離である。もとは鬱蒼たる曾根崎の森（ゆえに人目をさける心中の地、人は繁華街なんかで心中しない）であり、この地は新地であった（曾根崎新地、北新地）。今は大阪一の繁華な、西日本一の地価の地となっている。近松のいた当時、大坂の中心はもつと南のほうであった。詳しくは摂津名所図会（今から200年程前の記述）などを見られたいが、作品に蜷川なども出てくる。八百八橋——大阪の食倒れは、杭倒れとも言われる——とうたわれた大坂も、今、川は多く埋めたてられている。露天神社境内には、石の鳥居に米軍の機銃掃射の跡もあつて生々しい。また左近の桜、右近の橘もある。そしてそこより歩いて10分ぐらいの所に、初めての現代劇（世話物）——人形浄瑠璃はチャンチャンバラバラの時代劇が中心——ということで、興行用として取り入れられた、「曾根崎心中」の観音廻りの一番目の、源融、ゆかりの太融寺もある。ここには芭蕉の728「しら菊の目に立てて見る塵もなし」（上記の算用数字は、

『芭蕉全句集』（角川ソフィア文庫、2010年）のそれ。以下同じ）の句碑もある。さらにこの大坂三十三所の観音（霊場）廻りの寺のかなりは現存している。是非行きたい。この「曾根崎心中」の冒頭は、「げにや安楽世界より。今此娑婆に示現して。我らがための観世音仰ぐも高し高き屋に。登りて民のにぎはひを。」（『近松浄瑠璃集上（新日本古典文学大系91）』岩波書店、1993年、105頁）から始まって、荻生徂徠が絶讃した道行——平家物語、太平記、謡曲などの伝統をもつ——「此世のなごり。夜もなごり。死に行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足つつに消えてゆく。夢の夢こそあはれなれ。」（同124頁）の名文もある。そうして断末魔の苦しみの後、二人は（極楽）浄土へ旅立ち、「取伝へ貴賤群衆の廻向の種。未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」（同130頁）と結ぶ。ある評者は日本最高の名文が近松の文章だと言ふ。一見解である。

次に「鑑の権三重帷子」の女敵討ちの舞台は、龍馬のドラマで有名な寺田屋にも近い伏見の京橋であるが、今は車の行き交う何の味もない場所であるので、故篠田正浩監督映画「鑑の権三」（岩下志麻、郷ひろみ主演）では、岩国の錦帯橋でロケをした。また鑑の名手である笹野権三が簡単に討ち取られるのが妙だとの論もあるが、権三は（妻と共に）討たれる、死ぬつもりであつたのだらう。そして同じ女敵

討ちの「堀川波鼓」の舞台は、今の京都市の堀川下立売辺——実事件の場でもある——であり、ここには伊藤仁斎（1627〜1705年）の古義堂跡の邸宅が今なお現存している。近松と仁斎の生涯は共にかなり重なっており、他の要因もあろうが、敵討ちの舞台にここを選んだのは、ある意味、仁斎の儒学に対する近松の皮肉もあるのではないか。なお仁斎の墓は、子の東涯、三条西実隆、角倉了以一族、阪妻（阪東妻三郎）などと共に京の西北、嵯峨の二尊院にある。これと対照的に京の東北の法然院には、谷崎潤一郎、河上肇、内藤湖南らの墓がある。以上、「堀川波鼓」、「鑑の権三重帷子」、後述の「大経師昔暦」を近松の三姦通物と呼ぶのであるが、前の二つは悪役を配しての、当人は勿論のこと、周りがすべて不幸とならざるを得ない。悲しい物語である。近松の見つめたものが何であつたか、しみじみと考えさせられるものがある。

さらに京都を舞台としたものに、「大経師昔暦」——西鶴にも「好色五人女」の巻三「中段」に見る「暦屋物語」が存在——がある。四条烏丸であり、そこは、新井白石の師・木下順庵の邸跡近く、また本居宣長の京都遊学（師は堀景山）の史跡も近い。その作には、大経師以春やおさん茂兵衛が登場し、それは大映映画「近松物語」（溝口健二監督、長谷川一夫、香川京子主演）となった。二人は捕えられ処刑にあうところを黒谷の東岸和尚に救われるのである。

よかった！ この作品は、前述の西鶴の巻三の

話を十分参照し、これを巧みに按配しているとされる。そして近松作の忠臣蔵とも言うべき「碁盤太平記」には、大星由良之介の山科閑居も出てくる。この作は、後の「仮名手本忠臣蔵」と同様、時代設定は南北朝の動乱、太平記の世界である。これは「長恨歌」が漢の世、源氏物語が約百年前の延喜、天曆年代、醍醐、村上帝の御代を材としているのと同じである。

そうして小春治兵衛が主人公の、世話物最高傑作——ある人は「冥途の飛脚」——とされる「心中天の網島」の網島は、今の造幣局の近くである。また「女殺油地獄」で最初に登場する野崎村・野崎観音——近松半二の「新版歌祭文」のお染久松、東海林太郎の唄で有名——は、大阪市の東北、四条畷近くにある。

この「女殺油地獄」は何かと話題の多い作であり、よくドラマ、映画、舞台となっている。1992年の映画では樋口可南子がお吉を演じた。なぜドラ息子と兵衛が貞淑な人妻で子持ちのお吉を、不条理に殺さねばならなかったのか、諸説あるが、梅原猛氏は、この「女殺油地獄」の書き出しである「船は新造の乗心サヨイヨエ。君と。我と。われと君とは。凶に乗つた乗つて来た。しつとんとん／＼しとんとん。しつとと逢瀬の波枕。」（近松浄瑠璃集下（新日本古典文学大系92）岩波書店、1995年、167頁）という当時のこの流行歌の一節の「新造の舟が、この油地

獄の女主人公お吉のただよわす無意識のエロティシズムを意味し、このエロティシズムが、道息子、与兵衛を殺人に誘ったものであることを暗示している。」（『地獄の思想』中公新書、1967年、174頁）と言う。近松は当時、一人で、ものゝである人形を操っていたゆえに、殊更詞が重みを持っていたと言えよう。そして諏訪春雄氏は「養父徳兵衛を自分の借財で苦しめまいとの一念からこの挙に出たとする説」を始めとして様々な説をあげて、近松は「心理描写とイメージの輻輳によって、お吉の死を理屈ではなく、心情的、感覚的に一挙に観客に納得させようとしている。」と述べる（『図説日本の古典16 近松門左衛門』集英社、1979年、76頁）。これに対して井口洋氏は、「この不良青年のようやく到達した改心が、かえって殺人につながるという逆説がそこに成立する。与兵衛の行動を了解不可能な悪とする解釈は、近代の誤解に属する。」（『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店、1986年、296頁）とされる。

さらに近松には「生玉心中」の作があり、この生玉社（生國魂神社）境内は、「曾根崎心中」において、徳兵衛が友人九平次から恥辱を受けた所であり、「生玉万句」といって、西鶴が1673年、この生玉神社において、万句興行を催した地としても名高い。虚実皮膜論ではないが、近松は、熱い心と冷静な眼によって、浪華の人々の諸相を見つめていたと言えよう。

○芭蕉の史跡

次に芭蕉について述べよう。生まれは伊賀上野であり、市内に生家跡もあるが、柘植説（そこは横光利一の郷里でもある。彼は伊賀上野の県立第三中学校に入った）もある。23歳の時、出仕していた藤堂良忠が病死し、藤堂家を辞している。31歳、北村季吟（京、烏丸松原）から「埋木」の伝授を受けるが、この年の冬あたり、に、上方に留まらずに江戸へ下向している。伝統の上方ではなく、新興の江戸に我が身を賭けたと言えよう。孔子と同様、様々な仕事（こゝと）をし、以降、江戸が活躍の場となるが、全国を旅し、故郷にも帰っている。その時の句が、967「旧里やへその緒に泣くとしの暮」（笈の小文）である。亡くなったのは、御堂筋、旅舎花屋であり、「終焉の地」の石碑があるが、大路の中にあり、見に行くのは命がけである。有名な841「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」が、辞世の句とされているが、これは芭蕉の人生の最後の句である。その句碑が南御堂・難波別院（御堂筋の由来）の境内にある。芥川龍之介の「枯野抄」は、師芭蕉の臨終時とその弟子の言葉を描いているが、そこには漱石とその弟子達の様子が投影されていると言われる。芭蕉の遺言により、大好きな義仲の墓のある、近江（大津膳所）の義仲寺（義仲の最期となった粟津の松原辺。乳兄弟の今井兼平の墓もJR石山駅近く）にあり、二人の墓は近いと言えは近い）に葬ら

れたのである。弟子たちが運んだのであるが、さぞ大変な作業であつたろう。さらに大阪では、前述の太融寺に「しら菊の…」の句碑が名高い。そして淀君の墓（伝）や他の史跡もこの寺にある。

著名な「おくのほそ道」には、関西は登場しないが、最終地は大垣（岐阜県）であり、761「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」というように、二見（三重県・懸詞）が出てくる。紀行文を見ると、「鹿島詣」「更級紀行」は、言うまでもなく関西は訪れていないが、「嵯峨日記」は文字通り嵯峨であり、去来の落柿舎など嵐山、嵯峨野史跡めぐりのコースが出てくる。二回の「野ざらし紀行」では、名古屋より関西一円をめぐる。さらに「笈の小文」もそうであり、南は和歌山、畿内の西の端の須磨（摂津）、その隣の明石（播磨）——共に源氏物語の舞台——にまで足を伸ばし、421「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の名句がある。このように関西一円の古史跡、名所をくまなく芭蕉は訪れていると言える。そうして京東山の円山公園近くには、芭蕉の敬慕した西行の西行庵と並んで芭蕉堂がある。

ちなみに芭蕉を尊崇した蕪村の生地は毛馬（大阪市の北）であり、今は公園として、野外博物館のごとくなっている。（北）梅田に有名な「菜の花や月は東に日は西に」の句碑があり、この句で分かるように、当時、近郊（商品）農業が大坂郊外に進出したと思われる。生家のことは不明であるが、生家は没落豪農とおぼしく、故郷のこと、幼い頃のことは、作品以外ではさほど分かってはいない。与謝蕪村というごとく、丹後の与謝にも滞在したことがあり、「夏河をこすうれしきよ手に草履」は、その時の句である。亡くなったのは京都であり、市内所々に史跡がある。洛北の金福寺に墓があり、この寺は芭蕉庵のあつた地である。

○西鶴の史跡

最後に西鶴の史跡を見ていくことにしよう。

西鶴は大坂の裕福な町人の家に生まれ——場所をはっきりしていない——、若い頃は前述のごとく俳諧師であつた。談林俳諧の西山宗因——梅田近くの寺に彼の墓があり、大阪の天満宮の南にも、宗因ゆかりの向栄庵跡の碑がある。こゝは川端康成の誕生地の近くである——に入門した。矢数俳諧はあまりにも有名なので省略する。後、浮世草子の作者として、主として好色物、町人物の作で、上方を舞台としているのは言うまでもない。52歳で、今の大阪市、谷町三丁目の錫屋町の西鶴庵で病没したとされる。が、『西鶴事典』（おうふう、1996年）には、「彼の伝記・出自については不明な部分が多い」（11頁）、「おそらく西鶴庵で病没したと思われるが、その前後の状況は不明」（27頁）とある。辞世吟は「浮世の月見過ごしにけり末二年」である。

「好色五人女」には、江戸の八百屋お七の話も出てくるが、何と言っても播州姫路でのお夏清十郎の話が名高い。私鉄水間鉄道の終点の水間駅から南に行った水間寺に、お夏・清十郎の墓がある。西鶴の墓（誓願寺）については、近松のところで言及している。この墓を訪れた川端康成の写真を見たことがある。また墓の傍に「鯛八花ハ見ぬ里もあり今日の月」の句碑がある。

この西鶴について、芭蕉は「西鶴が浅ましく下れる姿あり。」と述べている有名な言説がある。もとは「去来抄」であり、「先師曰く、世上の俳諧の文章を見るに」で始まる。詳しい言及は避けるが、興味ある方は、広末保『芭蕉と西鶴』（未来社、1963年）を見られたい。そして私は、伊勢、源氏物語をふまえた「好色一代男」よりも「好色五人女」を好む。前述の巻一「姿姫路清十郎物語」、巻二「情を入れし樽屋物語」、巻三「中段に見る暦屋物語」、巻四「恋草からげし八百屋物語」、巻五「恋の山源五兵衛物語」の五つであり、映画、ドラマでも著名である。末の巻五のみがハッピーエンド、めでたしめでたしとなっているが、他は悲劇である。西鶴の見つめたものが何であつたかが物語られていよう。